

議 事 概 要

【第14回北陸地域連携プラットフォーム 平成29年12月12日(火)】

【メンバー】

今日はどうもありがとうございました。提言と言われると非常にハードルが高いのですが、たまたま2週間ほど前にアメリカのシアトルに行ってまいりまして、そのとき思ったことは、ITが非常に強い西海岸ということで、マイクロソフトさんの本社にも行って来たのですが、最初のイメージでは、当然ああいうIT企業なので、誰にも見せないといったイメージがあったのですが、非常に観光客を意識した仕組みづくりが進んでいまして、朝7時くらいからもうかなりの人が来ていました。最後は非常に大きなストアがあって、そこでしか買えないマイクロソフトの鞆などがあって、そこでお金を落とす仕組みになっていると。

あと、アップルさんやコストコさん、スターバックスさんの本社など全部シアトルにあって、皆さんそういう産業観光を意識した取組をかなりやっているというところが日本とは随分差があるのかなと。

もちろん世界を代表する企業なので当然かなというところもあるのですが、何を言いたいかというと、さはさりながら、我々銀行として見てみますと、最近、元気のある酒蔵さんは、見える化と同時に見せる化をして、そこで製造工程の清潔さもアピールしながら、最後は試飲して買っていただくための大改造をしたいので、投資をする。あるいはものづくりの方も、プライベートショーは、外でやるのも良いけれど自分の工場でやりたいからそこを改造して人を集めたいのだと。そういう動きがこの地でも始まっていますので、我々としては産業観光ということ意識しながらお手伝いをしていきたいなというのが1つ。

もう1つは、先生はおそらく産業観光だけではなくて色々な分野の観光にも精通していることだと思うので、もちろん釈迦に説法かもしれないのですが、やはりフランスやアメリカと違うのはインフラ、インバウンドあるいは東京からいらっしゃるお客様の交通のインフラやキャッシュレスの取組というのは銀行でも色々できる場所がありますので、やはりそこはこれまで以上に、特にオリンピックも意識しながら進めていきたいなというところと、やはり裏にあるのは、生産性向上が各企業あるいはサービス業にないと、日本一進んだ人手不足の地域なので、そこは銀行としても色々お手伝いができる場所ではないかと思って、提言というよりも、小さな決意表明ということで意見を述べさせていただきました。

【メンバー】

羽田先生、どうもありがとうございました。羽田先生は川崎の話をされていましたが、私、家内の実家が川崎ですけれど、何か昔のことを思い出しまして、昔はなかなか川崎と

言わずに神奈川県出身と言っていたような気がしますけれど、最近では武蔵小杉と言うと見方が変わってきて、30分で東京まで行けますし、超高層ビルができて全くまちが変わってしまったというのは、地域のブランディングというのは、しっかりインフラさえ造っていけばいつでも変えられるのだなと思って聞いていました。

産業観光ということで、今ほどお話にもありましたが、酒蔵メーカーさんでなかなか販売できないなというところが、小樽で年間800万人来る中で1カ所しかない酒蔵ですけれど、もう完全に体験型にしようという形に変えて、そこを大型バス4、5台停まれるぐらいにしたと。しかも杜氏を全部女性に変えてそれぞれの女性が作ったお酒として、完全に観光を目的にした作り方をしたところ、その単体でもう黒字になったというケースがあります。

産業観光という話の中で、なかなか体験できないものを体験するというのは非常に貴重だと思います。例えば数年前、木更津で40メートル下のまだ工事のところをエレベーターでずっと降りて、まだ電車の通っていないところを見学したことがあって、これは貴重な体験ですけれど、ただ、これが何人に見てもらえるかということを見ると、産業観光といったものを考えたときには、やはりその限界もあるなと思っていました。

そういう中で、銀行としては、そういったものの収益性あるいは波及効果などというものをアシスト、サポートできたら良いなと思っています。

それと、ちょっと話は変わりますが、うちで今月ビジネスコンテストをしたところ、1社面白い会社がありまして、外国人旅行者とアクティブシニアがリンクすると。例えば外国人が肉じゃがを作りたいなど、ここに書いてあるような陶芸やそば打ちというのは通常あることだと思いますけれども、そうではなくて、日常の体験をそのまま味わいたいインバウンドの外国人がいっぱいいると。そういったものを退職した方とインターネットでリンクする。かつそれは多言語です。5カ国語ぐらいだったかと思っていますけれど、リンクすることによって、外国人がそこに来て2時間料理を作って何千円払っていくと。そこでビジネスが成り立つ。

何を言いたいかと申しますと、要はインバウンドの方も含めて、そういった情報をどうリンクして提供できるかがおそらく一番大事ではないかと思っています。やはり人によっては、永平寺の精進料理を食べるのではなくて作りたい方もいらっしゃると思うのです。だから、そういった方をどうつなげていくかということですね。

それと、そういったものを情宣していくに当たって、富山で「デンサン」と言って、クラウドファンディングでお金を集めて銅器の鋳物の映画を作って、その中に伝統産業の成り立ちや技術的なことをいろいろ情宣したものを作りました。

こういった活動というものを粘り強くやっていくことが大事なのかなという中で、地域のブランディングをどう創っていくかということが大事だと痛感させていただきました。

【メンバー】

羽田先生、今日はいろいろと御教示をいただきまして、ありがとうございます。

私からは、当会の日頃の活動の一端を御紹介させていただきます。御検討の参考にして

いただければと思います。

私どもといたしましては、従来から観光を大きな政策の柱の一つとして位置づけており、中でも教育観光、教育旅行（修学旅行）や、先ほどからも少しお話があります歴史ツーリズムあるいはスポーツツーリズムなどのニューツーリズムの一環として、私どもも産業観光、いわゆるインダストリアルツーリズムの重要性について深く認識をしているところでございます。また、北陸産業活性化センターさんと連携し、北陸の産業観光の実態調査を行いまして、産業観光マップの作成にも関わらせていただいております。

このように、私どもでは、中期アクションプランや、単年度の事業計画に観光を大きく掲げて事業展開を図っております。その他、毎年行っております政府要望につきましても、これらの推進に係るバックアップを国のほうに要望しております。

先ほどからお話が出ておりますように、北陸新幹線の金沢開業効果が発揮されている今こそ、産業観光というのは持続的発展に効果を上げるものと思っておりますし、さらには、伝統工芸を中心にインバウンド観光にもその領域を広げる可能性が大きくあると考えております。

これに関して、私が常に使っているキーワードが3つございます。1つ目はアクセシビリティ、2つ目はサステナビリティ、3つ目はクリエイティビティ。新幹線ですから是非北陸に来てくださいというアクセスもあるのですが、私どもの心にもアクセスしてくださいというつもりでアクセシビリティ。それから先ほどから出ているように、継続的にやるということですからサステナビリティ、その中には新しい発想も必要なのでクリエイティビティ、こういった言葉を使わせていただいております。

また、私どもの中では、北陸観光サロンという組織を持っておりまして、これまでに、アメリカのフロリダ州における観光事業の果たす役割や、最近料理本で有名になっている「ゴ・エ・ミヨ」とのコラボ、最近はAirbnbやユニバーサルデザインなど、そういったものも観光に非常に深く関わっていることをお話ししております。それから、ちょっと宣伝になりますが、私どもの50周年記念事業の一環として来年の1月31日に開催する第7回目の北陸観光サロンでは、皆様よく御存知のデービッド・アトキンソンさんをお呼びする予定にしております。

この方は、今、日本政府観光局の特別顧問をつとめておられ、イギリス人でもありながら、国宝や重要文化財の修繕をされている小西美術工藝社の代表でございます。おそらくアトキンソンさんからもこういったお話を伺えるものと期待しております。

さらに加えます、来年5月、私どもの50周年記念事業の一環として記念式典を行いますが、そこに寺島実郎先生をお呼びすることにしております。先生がちょうどその機会に北陸でインダストリアルツアーを企画したいと仰っております、私どもも是非御協力をさせていただきたいということで、特に体験型のツーリズムを中心に、先生の塾生の方々が30人ぐらいいらっしゃる予定で、北陸を御紹介すべく今調整中でございます。

それから、皆様方によく御紹介をしておりますのが、シェアの高い北陸のものづくり企業を紹介している「北陸のシェアトップ100」ですが、これを今年度改定いたしまして、来

年は少し掲載数を増やした「北陸のシェアトップ150」として発行する予定です。

これはもともと産業振興や、学生の地元定着あるいは回帰のために使っていましたが、これは産業観光にも活用できるのではないかと考えております。

最後に、観光振興というのは産業振興にも大いに関わってくるものでもありますし、さらにこれは文化度の一層の向上にもつながっていくものですので、非常に広がりを持った活動になることが期待できると思っております。私ども一生懸命やりますので、また皆様方からも御教示をよろしくお願ひしたいと思ひます。

【メンバー】

大変素晴らしいお話で、参考にさせていただきます。「るるぶ」が、新しい「るるぶ」と古い「るるぶ」とありますけれども、この中で、「食べる」というのがやはり入っていますので、「食べる」というのはこの北陸にとっては大変強い武器だなと感じておりました、新しい「るるぶ」になっても北陸というのは結構強いところを持っているなという感じがいたしました。

それから、今私らが色々苦心しておりますのが、恐竜博物館というのが、世界三大博物館の1つと言われているのですが、年間で大体90万人ぐらいの人が来るようになりまして、特に夏場などお子さんがお休みのときには本当にすごい渋滞でたくさん人が来るのですね。ところが、その方々はそれが立地する勝山市で観光をしないということが1つ悩みになっております。それから、永平寺と割と近いのですが、恐竜博物館へお子様連れで来られた方は永平寺へ寄る客ではないのですよね。その辺のつながりがいまいち難しいと。

それから、今ちょうど雪が降りまして、大変雪質の良いスキージャンというスキー場がありますけれども、ここも御多分に漏れず、現在年間25万から30万ぐらいの入りで、ピーク時から半減していると思ひます。そういったスキー客と、恐竜博物館との連携もとれていないということで、お客さんは目的をかなりはっきり絞って来られているような感じがいたします。

産業観光ということであっても、一方的にこちらで組んで売り出しても、なかなか食いつきが悪いとか難しいのかなということも考えておりました、産業観光は昔から色々言われておりますけれども、どういう組み合わせでどういうところをやったら良いのかというのは、なかなかこれからの課題として残っていくのかなという感じがいたしております。

それから、三方五湖の話も最初に出ましたけれども、三方五湖というのは皆さんお越しになったことがあるかと思ひますけれども、あそこは湖があるというだけではなくて、最近では年縞と言ひまして、湖の底の地層が10万年前のまま残っていて、色々研究するのに非常に役立っております、そういったことを基にお土産の開発なんかもされております。

それから、ほとんどの皆さんはあまり気がつかないのですが、あの三方五湖というのは、一番奥のほうへ行きますと水月花という町営の宿舎がありますが、そこから見ると

湖と山がありまして、送電線が一本も見えないのです。箱根で送電線を見えないような開発をしたとかということをお耳に挟みましたが、福井の場合はそういう余計なことに気を遣わなくても、自然そのままが見えるようになっている。

これを福井の方に言うと、「えっ」と驚く人のほうが多いですね。それはわかっていたという方に僕は今まで一度も会ったことがなくて、そのような観点で、地元においても、産業観光も含めてその観光の魅力というのが掘り出されていないところがまだあるのではないかという感じが日頃からしております。そもそも福井というのはあまりビッグな観光地が無いところですけども、だから一気に人を寄せ集めるというのではなくて、地元の人だけが知る面白い所というような売り方で持っていくと、基本的に我々福井県では、観光産業をはじめ観光は割とマイナーですが、そういったところに新幹線が来て一気に人が増えるということは我々望んでおりませんので、徐々に増えていく、それが安定的に推移していくということにつながっていくのかなと考えております。

【メンバー】

産業観光で通年おやりになるということ自体が大変良いことだと思います。日本の歴史教育の中で、様々な理由があるのでしょうかけれど、明治までは教えられていますけれど、それ以降は産業発展について近・現代史は教えられていない小中学校がある。そこに光を当てるという意味でも素晴らしいことではないかなと思います。

富山県の場合、明治以降の産業の歴史というのは割とはっきりしてしまっていて、どうしてアルミ産業があるのかということですが、売薬商から電力会社が出てきて、そして当時、東京の電力会社の半分の電力費で重化学工業の誘致を行ったと聞いています。アルミなんかは特に電力の塊のようなものですから、それが富山県に定着したということだと思います。

それから、これは皆様あまり御存知ないですけども、全国に電力会社は10社ございますが、小さな沖縄電力を除きますと、北陸3県の中核都市は金沢ですけども、中核都市に電力会社の本社がないのは北陸電力だけでございます。本店は富山市にある。それだけ水力発電の力が大きかったということかと思えます。

それで、私、思うのですけれども、この産業観光に関しましては、やはり観光全体で考えていただいて、そのうち、光を当てるという意味では産業観光が良いですけども、北陸は様々な観光資源、食もありますし、先ほど御案内があった立山黒部アルペンルート、能登はじめ永平寺、本当にたくさんものがありますので、それをどう活かしていくかということのほうがより重要だろうと思えます。

と言いますのも、3つの県があるのですが、3つの県それぞれにもう十分な観光資源がありますので、どうしても連携というものをあまりお考えにならない。各県単位で考えていましたから、広い意味の巨大な観光資源を生かしていこうというようになかなかないのが現実ではないかと思えますね。各県単位あるいは各県の中での市単位で考えていくと。これはやはり観光というのは横串を入れていかないといけないものがございます

ので、連携しない理由の1つは、おそらくはどこか、財務局でも結構ですけど、どこかの機関が、もっと連携を強めたらこんなに観光客が増えて、そしてこの地域のGDPが増えますよというような試算で結構ですので出していただくと。私、仕事の関係で全国を色々周りましたけれど、これだけ大きなポテンシャルがある地域はないと思います。

つい最近も、10月に「ブラタモリ」で立山黒部が3週連続放送されまして、その結果かどうか、その後、落差日本一の称名滝に行った方のお話によりますと、今までに見たことないぐらいに観光客がいたというぐらいで、テレビの力は大きいわけですが、それだけ大変なポテンシャルがこの北陸3県にある。あとはその連携ですね。特に県単位による連携をどう強めていくかということ、財務局の皆様は割とこの各県よりは少し離れた存在ですので、また強く打ち出していただければよろしいのではないかと思います。

【メンバー】

私、今までもこのプラットフォームに参加させていただきまして、この北陸地域の抱える問題点などについて色々勉強させていただきました。今、日本のGDPは伸びているのですが、先進国中最下位といった状況にありますし、人口減少また労働生産性も低いというような指摘も強くございます。働き方改革としては、私どもでもメインテーマとして取り組んではおりますが、まだまだ皆さんの意識は高いとは言えないような状況であります。

これらの問題点に対する具体的な行動が求められてはいますが、何となくやらされている感じというのがあるようで、なかなか具体的な、また積極的な行動にどのように出していけば良いか、意識は高まりつつはありますけれども、各企業さんはなかなか実行できないというのが現状であろうと思っています。

こういう中で、大きなテーマではなく、産業観光という具体的に1つのテーマに絞って今年に取り組むといった方向は大変良いのではないかなと私は思っています。

ここでの産業観光の目的、観光客重視はもちろんのことでございますが、やはり北陸の経済の持続的な成長、拡大のために、今、人手不足感が多くありますので、UターンやIターン、また優秀な留学生の定着というものにつなげることも重要であり、企業は、観光だけでなくそれを目的に取り組むべきだと思っています。

羽田先生には、産業観光について様々な面から御説明いただきまして、ありがとうございました。この北陸には大変魅力的な文化、工芸があるということでございまして、その延長上にあります国内外から高く評価されているものづくりの産業の集団が石川県にはございます。実際に韓国のテレビでも取り上げられましたし、中国山東省でも石川県（北陸地区）のモノづくりクラスターに似たようなものを創ろうという動きもありましたし、たしかイタリアでもそういう動きがあったように私は記憶をいたしております。

石川県と申し上げて誠に申し訳ないですが、石川県は明治時代、最大の輸出産品であります絹、それから絹織物が盛んであった。特に日本海沿岸の企業は織物を織る、作ることに特化してきたのですが、なぜか石川県金沢は、金沢織機と言われるぐらい、最盛期には1

00軒ぐらいの織機屋があったのですね。

これはなぜかと言いますと、やはり石川県、北陸の伝統工芸は大変高い評価を受けておりますが、織機を作るのはいわゆる宮大工でございまして、加賀藩が揃えた非常にレベルの高い技能者がたくさんいたということが言えるのだらうと思います。

そして、その伝統が基礎になって、この間もグローバルニッチトップ企業100選というので石川県からも数多くの企業が選ばれましたけれども、そういうことにつながっているのではないかと考えています。

先ほど先生から、B to Bの企業は観光にあまり魅力がないというお話でございましたけれども、北陸の高い技術力を持った企業、もちろんB to Cもありますけれども、魅力あるB to Bの企業が多くあります。先ほど申し上げましたように、海外からも注目されております。

そして、この魅力は、一般的でない企業をいかに産業観光に組み入れていくか、これは大切なことではないかなと思っています。例えば東京や大阪から北陸のグローバルニッチ企業の見学の観光など、コースの1つに企業観光を入れても十分に成り立つのではないかと考えています。

インバウンドの人たちにとっても、特にヨーロッパでは、芸術というのはジャポニズムと言うように大きく影響を与えていますので、特に欧米から来られる人たちには、やはり日本のジャポニズムを生んだ文化というのは大変に興味があることだらうと思っていますし、それが残っている古い街並みは京都と金沢でございまして。このようなものもしっかりと考えてやったら良いのではないかと考えております。

そして、B to Bの企業、ニッチトップ企業、これは、先ほど申し上げましたように優秀な人材の確保、また優秀な外国人留学生、こういった者に、あまり観光に魅力のない企業でも、そこに就職しようかなということを思っただけであれば人材の確保につながる。それとまた、先ほどもありましたように、観光してもらうことで新たな市場が拡大できるということがあるのではないかと考えています。

そしてまた、観光にはやはり学生だけじゃなくて、学生の就職には、お父さん、お母さんの影響が大変強いので、どちらかというとお父さん、お母さんに見てもらったほうが良いのではないかと考えております。

【メンバー】

私、最近やっと地元、北陸の良さを自分自身もわかるようになってきました。というのは、全国のお友達から、新幹線ができたから北陸へ行くという話がよく出てくるようになりまして、私、観光業をやっていないのだけれど、そのお世話をするようになってきましたので、自分が知らなかったらだめだということで、地元をよく知るということをさせてもらえるようになったのですね。

その結果、やはりルートは新幹線で富山へ入る前に金沢に入って金沢も見よう、その後富山にしようなど、逆の場合もあります。そうやって私自身も、行って、見て、触れて、

それで自分の経験から、あそこが良かった、ここが良かったと。例えば1つの例を挙げると、YKKさんのテーマパーク、あそこへ行くと、やはりすごいということで、買い物も結構なさいます。石川へ行くと石川で、また石川の美味しいものをいただいて、石川の古いところの良さに触れて良かったとみんなから褒めていただける、それも1つですけど、例えば今、この産業観光マップを見て、うちのような小さな会社が入っているので自分自身驚いたわけですけど、例えば経済産業省の中で、うちの会社が夏休みに子どものための日記教室というのをやっているわけです。そういうのに参加すると、子どもたちもキーストラップみたいなものにアルミの着色だったり、ドラえもんの何かを作ったりして、子どもが喜ぶし、子どもも変化に対して目を輝かすものだから、一緒に来ている親御さんも喜んで、そうすると、自然と富山のここへ行ってきたらこうだよという、すごく誇りに思えるようになったというのも1つあります。

ですから、色々な方に見ていただく、来ていただくというのはこんなに大事なことのかなと思い、それが大人になったときに、先ほど仰ったように、小さいときに見たときの記憶が忘れられないなど、結構大人になってから思い出すものなのですね。

だからということで、機電工業会のほうでも、色々な富山県の工場を子どもたちに見学させるということで、資金を募って取組を行っております。そういう形で、この新幹線効果がこんなに生ずるのかなと。

ただ、富山だけを言いますと、今、駅周辺は環水公園あたりも素晴らしくなっているし、みんなに言えるのですね。ただ、今まですごく発展して、私たちが小さいときに遊びに行っていた商店街が今のところまだくすぶっていて、やはり後継者不足でだんだん廃業に追いやられているということで寂しくなっているのと同時に、石川県、金沢と違う、金沢を羨ましいと思うのは、夜の観光が富山は本当に少ないというか、無いのですね。ということで、新幹線なら20分で金沢へ行けるので、夜は金沢で過ごすなど、そんなふうに使分けやっていますから、そういう意味で、北陸3県が力を合わせれば、世界の人たちにも宣伝できるかなと勝手に思っております。

【メンバー】

羽田先生、今日はありがとうございました。住友林業さんにおきましては、私ども大手ハウスメーカーからお仕事をいただけた第1号でございまして、20年ほどお付き合いしております。当初、やはり四国の産品、林業をととても誇りに思っておいでて、それをお話しして下さったことが思い起こされまして、ありがとうございます。

先日、いしかわ産業教育フェア2017が10日に産業展示館でありましたが、これは石川県の高校生、実業高校が集まって日頃の勉強の成果を発表し合うところなのですが、この中でちょっと不思議に思ったのが、石川県の伝統工芸が少なかったというところに気付かしまして、私はこの産業教育推進委員会のメンバーでもありますので、話しようかななんて思いながら見学してきました。

珠洲焼におきましては、作家さんのものを持ってきて並べるなど、そういったことがあ

りまして、少し残念だったなと思います。

それから、私、商工会議所女性会の会長を務めさせていただいておりますが、この研修委員会で、各地に見学に行っていました。石川県におきまして、スギヨさんやコマツさんなど、先日は北海道の余市、それから京都の川島織物など見学させていただいたのですが、食品関係の会社さんは見学道路がきちんと観光客用に作ってありまして、石川県におきましても、ハチバンさんを見学したときにはそういった形になっておりました。

川島織物さんに関しましては、私はもう帯という感覚しかなかったのですが、現在、帯や緞帳は全体の8%ぐらいに少なくなっていて、あと92%が建材のメーカーになっていてきているということでした。こちらも、見学ルートというか、きちんと整備されているのですね。石川県の工業関係、特に鉄工関係のところを見学しましたときにはそういったところがなくて、結構危険なところを、「そこ、危険ですよ」と言われながら見学することが多くて、コマツさんなどの大手さんはきちんとしていましたけれども、そういったところもどんどん銀行さんから話しかけて、こういう通路を作ったらどうですかという形で進めていただけたらいいかなと思います。

それから、私事ではございますが、本社に「きてねっと」というプラットフォームのシステムをこの2、3年かけて作ったのですけれども、山代温泉からスタートしまして、今、片山津温泉、山中温泉と宿泊施設を巡回しているサイトでございます。まだまだお金にはなっていないので、先ほどどなたか連携というお話をされましたが、こちらから進んで色々なところと連携をしながら広めていきたいなと思っております。

これにつきましては、前に金沢市の観光課の方とお話ししましたら、7カ国語以上なかったらだめだということでお話しいただいたのですが、今はもう16カ国語できておまして、かなり精度が良くなっておりますので、こういう産業観光マップ、このままもうウェブに載せられるのではないかと考えて見ておりましたが、また是非よろしく願いいたします。

【メンバー】

今もお話がありましたけれど、産業観光マップということで、たくさんあるなと思って改めて感心して見ていたのですけれども、この中に載っていないものが1つあって、僕は駅だと思うのですね。金沢駅なんていうのは世界で一番美しい駅と言われていて、もてなしドーム、鼓門を入れた背景というのは非常に綺麗で、あそこで実際撮影していかれる観光客の方もいるし、かなり知名度は上がっていると思うのですね。ただ、来ていらっしゃる方の半分ぐらいなのかなと思ったりもします。

それから、ここにいらっしゃる皆さんは知っていると思いますけれど、金沢駅のコンコースには門柱があって、そこには石川県の伝統工芸品、これは大体30品目ぐらいありますが、意外と高い場所にあって知らない人が多いと思います。これも勿体ないなと思うのです。実際、作家さんが作られたものを1つ1つ見ると、なかなか良いものなのですよ。

それから、コンコースだけではなくて中2階の待合室にもありますし、駅が1つの美術

館みたいになっていて、こんな駅というのは世界中あまりないのではないかと思います。これも立派な産業観光の拠点だと思うのです。

今あるもの、観光施設にもう1つ見せる工夫というか、一手間かけるということをしていけばもっと付加価値がついていく。この付加価値をつけていくということが非常に大事だと思います。

それから、ここにも出てくる、例えば金沢で言うと近江町市場なんていうのも産業観光の一大拠点だと思いますけれども、ここも買い物をする、北陸の食が一堂に見られて非常に人気がありますけれども、残念ながら買っていく人ってあんまりいないのですよね。カニを送るよと都会の人に言うと、捌き方がわからないから要らないと言うのですよ。

それなら、捌いて送るよと言うのだけれど、沖縄の公設市場なんて、そこで魚を買くと、2階が食堂になっていて、そこで捌いてもらって食べられるのですよね。金沢駅はもちろんレストランなんかもあるし、ちょっと味見したり試食するコーナーもあって、あれは好ましくないと言われてはいますが、ああいう、その近くに実際に買ったものを調理してもらったり、あるいは調理の仕方を教えてもらったり、それでそこで味わえるような、きちんとした公衆衛生管理、しっかりとした場所があったら、買うだけじゃなくて、食べる、味わう、それから調理するとか調理の仕方を見るときか、そういった付加価値がもっとつけられると思います。

今言ったような色々な場所でやっている産業観光にもっと付加価値をつけていくということが1つ重要だと思うのと、それから、今までもお話が出てきていましたけれども、これにもありますが、それぞれ点なのです。この点を線にしていって面にしていくという、この工夫というのが非常に重要だと思います。

伝統産業で言えば金沢、それから富山の西部、これもほとんど旧加賀藩の伝統工芸で、色々なものがあって、これはもう色々とつなげられると思いますし、そういう点を線に、面にしていくという工夫も非常に重要だと思います。

【メンバー】

羽田先生、どうもありがとうございました。資料の中にも出てきましたが、川崎は工場夜景の産業観光によって都市のイメージが全く変わったと思います。川崎は氷見市出身の浅野総一郎がつくった京浜工業地帯ということで、川崎と氷見との交流も深まっています。川崎は工場夜景、氷見は定置網漁が大変有名で、この二つはそれぞれの産業観光の魅力になると思います。

北陸としてみれば、太平洋側の大都市とそのような結びつきを持つことで、地域同士の交流もできますし、産業観光を通じた交流を深めていくということも大事なことはないかという気がしました。

また、資料の中にもあったのですが、スーパーカミオカンデという研究施設が神岡の茂住にあります。そこで行われている研究は宇宙に関する難しい内容ですが、これをもう少しうまく地域の活性化に活かさないかと、以前から思っていました。

個人的なことなのですが、入社1カ月後にスーパーカミオカンデの前身・カミオカンデの取材に行き、水を入れるタンクの中を見せてもらいました。それが、初めて社会面の頭になった私の記事で大変思い出に残っています。あそこでは小柴先生と梶田先生の2人がノーベル賞受賞者となり、富山市からは田中耕一さんが出て、旧・大沢野町では利根川先生、高山では白川先生、名古屋では福井先生ということで、沿線の国道41号線はノーベル街道とも呼ばれました。これを活かしながら、スーパーカミオカンデなどの研究施設をもう少し産業観光に活用し、地域活性化に結び付けられないかと思っています。

ニュートリノや重力波の研究を通し、宇宙がどうやってできたかなど、宇宙の謎を探る研究です。それがわかったからといって、実際の暮らしに何か役に立つということでもないかもしれませんが、ロマンあふれる研究です。大学の先生たちも研究費を獲得するのに困っているようですので、産業観光を推進することで多くの人に来てもらって研究の意味などを知ってもらえば、大学としても文部科学省としても、予算獲得について理解を得られやすくなるのではないのでしょうか。

そのようなことをアピールしつつ、地域の活性化にも協力してくれないかということで、見学者の人数をもう少し増やすなど、そういう働きかけをしてもよいのではないかと、という気がします。

産業観光にはストーリー性や地域性があり、そこに住んでいる人が地域の良さを改めて見直す良い機会にもなると思います。企業で働く社員にとっても、自分が勤める企業にはこういう良いところがあったんだと改めて気づき、そこで働くことに誇りを持ったりすることもあるでしょう。それは、企業にとっても歓迎すべきことでしょう。観光客を増やすということだけでなく、そこに住んでいる人や地元企業に勤める社員が地域と自分の会社の価値を再認識する意味からも、産業観光を推進する意義があるという気がします。

【メンバー】

福井をいかにアピールするかという狙いで、県が県民から公募した「福井ふるさと動画コンテスト」で審査をしたことがありました。永平寺や美しい桜並木、九頭竜川風景などたくさんの応募があった中で、若狭の高校生が作ったビデオは自分が列車で学校へ通う、その道すがらの海の景色をずっと映しているだけなのですね。ところが、多くある観光ビデオより、私自身はこの素朴で何気ない風景に感動したのです。残念ながら点数は低かったのですが、2分間の中に凝縮された日々の若者の気持ちがストーリーとして素直に表現され、伝わってきたのです。

観光には産業観光などもありますが、「生活観光」という視点も大切ではないか。生活の中に様々な驚き、発見、感動があります。この視点を産業観光の中にも取り入れていけば、新しい資源として付加価値をつけた形で、1次、2次、3次産業を組み合わせる6次産業のさらに先に行くプラスワンの「7次産業」になるかもしれません。

そのためにも、必要なのは若者の視点を重視した未来を拓く戦略です。日常の発見、非日常の発見、さらに異次元の発見、そして未来へつながる発見が持続可能な地域づくりに

なっていく、そういう戦略が必要ではないでしょうか。企業、地域産業をアピールし、さらに質を高めていくには多様性、多面性が重要ですが、そこに必ず若者の視点を入れていただきたいと思っています。

産業観光で大切なのは、やはり感動と発見です。なぜ感動するのか。なぜそこへ来て何に感動したのか。そこで何を発見し、それがどうリピーターにつながっていくのか。得意なものづくりの物語性を幅広く展開していくことで北陸独自の戦略性をいっそう高めていくことができるのではないのでしょうか。目標、ターゲットをしっかりと定めないと、どこかの企業が産業観光でうまく相乗効果を出したということになって終わってしまいかねません。

我々は、北陸の強みを生かしたプラスワンの新たな7次産業化を、必ず成功させていくのだという気概と覚悟が必要です。皆さんの英知を結集すれば必ずできます。これを世界に通用するものにするためにどうしていくかという、そういうグローバルな視点こそが重要ではないかと思っています。

【講師】

まず、広域の連携ということですが、私、観光面では北陸3県はあまり連携してこなかったし、連携する必要がなかったのだと思うのです。というのは、3県とも観光の主たるマーケットが北陸3県内であり、中京であり、関西でしたから。

宿泊観光ということでは、日本人が行っている宿泊観光というのはもう30年あまり1泊2日旅行が60%から70%を占める、この構造は変わっていないのですよね。そのため、北陸3県の宿泊マーケットというのは1泊圏の3県内であり、中京であり、関西だった。だから、これまでは「単県だけでそれぞれのマーケットに対応していれば済んだ」わけで、首都圏なんてターゲットにする必要があまりなかった。別々に富山、石川、福井それぞれでやってこられた。でも、新幹線が入ってきて、やはりマーケットの構造が大きく変わった。まして、敦賀まで延びて、それで東海道新幹線も含めてということになると、首都圏マーケットを取っていくためには3県がきちんと連携しないといけないということが、観光関係の方々、行政を含めてどこまでわかっているのかというところがちょっと心配ですね。

広域の連携ということはそういうことで、それから私は、これも釈迦に説法で恐縮ですが、観光というのは基本、光を見る、示すことですので、光というのはそれぞれの地域の誇りであるので、産業観光ということでは、やはり北陸それぞれの地域ならではの産業面での誇りを見せる。これはいわばショールームだと考えたほうが早いと思うのですよね。ショールームとして北陸3県の産業を広く紹介していく。

そのときに、先ほども「感動が大切だ」という御意見がありましたが、まさにそれはそれで、まず観光に来られた方に買ってもらうためには、やはりものづくりあるいはそれぞれの商いに込められているこだわりをきちんと価値として伝えていくということだと思います。

産業観光で、よくツアーをやってそのルートに老舗と言われているようなお店を組み込

むことが多いのですが、そのときに非常に売行きが良くなるのは、そこのお店の方のこだわりや商いの特徴をきちんと説明する。ということは、価値をしっかりと伝えるということなのですが、そういうことが売上の増大につながっていきます。これは別に飲食関係などに限った話ではないので、やはりものづくりに関わっていらっしゃる方はそれぞれのこだわりを付加価値として伝えていく。それが販路拡大、売上の拡大に必ずつながっていく。産業観光というのは、そのような意味で格好のツールだと思っていただいたほうが良いと思います。

海外の事情はあまり詳しくはないですが、先ほどアメリカのシアトルなどの御紹介がありました。私の理解で言うと、一番進んでいるのはドイツ、それからオランダではないのかなと思います。

ただ、ドイツは、いわゆる近代化産業遺産、製鉄所の跡や炭鉱の跡とか、そういうのを活用して歴史を紹介している、あるいは、今日も画像でお示ししましたが、その跡を違う用途に変更して活用している。また、今日お話の中で御紹介しました、パスポートもチェックして受け入れているケース。これはオランダの港湾のコンテナターミナルの見学でやっているのですが、どうしても企業秘密や安全・保安管理などということが制約として絡んでくることが多いので、その辺はやはりある程度、身元が確かな人を一定人数限られた区域に限定して受け入れるということをやっています。結局、産業観光に限りませんが、この前も、インバウンドの誘致をしたいけれど、先生、どうでしょうかという話が来て、あなたのところはどのような外国人に来てほしいのですかと。それによって見せ方、伝え方は全く変わるので、ただやはり、それぞれの地域、企業がそれぞれ自分のところの発展のためにはどういう人をターゲットに来てほしいかというところをしっかりと考えていただくということなのではないのかなと。それでもって、身元がしっかりな方を受け入れる、ここまでは紹介するなどということが決まってくるのだらうと思います。

【座長】

本日は、羽田先生には大変素晴らしい御講演をいただき、ありがとうございました。

メンバー全員が、産業観光の必要性について、非常に大事だということでありました。そしてまた、課題も幾つか指摘されました。課題の1つは、今、羽田先生は北陸地域は3県1つだと仰いましたが、以前の本会における議論で、北陸3県は1つの県とならなくてはいけないということがありましたように、その重要性が指摘されたように思います。

本日は大学の方がおいでませんので一言申し上げますと、私は、産業観光は広い面で学生にとってインターンシップだと思います。産業観光、深く地域を知る、歴史を知る、その中で学生が自分の本当のあるべき姿、本当のあるべき姿というのは、生活するために働くというものではなくて、生きる楽しさ、自分の生きがいに関して気付くのではないのでしょうか。私の知り合いの1人がシリコンバレーのITの企業で働いています。楽しみはダイビングだと。仕事はその合間にするのだということで、我々が想像できないような高額な給料をもらっている。おそらく日本にいる若い人も、そういう未来を見据えていると思

うのですね。そのためにも、産業観光をより深くして、若い人が十分に自分の生きる楽しみを見出す、そういったことでも非常に重要だと思っています。

本日はどうもありがとうございました。

以上